

ネウボラ/ピックプリシン幼稚園

～子育て支援施策～

報告者: 本田 太郎

1 ネウボラ

(1) 概要

- ネウボラ (neuvola) とは、アドバイス (neuvo) する場 (la) という意味で、フィンランドの全ての自治体にあり、フィンランドの自治体が提供している子育て支援施設とそのサービスを指す。1920年代に新生児の死亡率が高かったころ、母子の命の安全確保、乳幼児の健康を守るために、小児科医、看護師、助産師らの有志によって無料で始められた。1944年に国によって制度化され、全国で800箇所を超える施設がある。
- ネウボラで受診した親に対し、原則一人のネウボラ保健師（ネウボラおばさんとも呼ばれる）が担当する。親への支援を同じ担当者が担うことによって、利用者がたらい回しにされることはなくなる。また、プライバシー保護への配慮から面談は個室で実施している。

(2) 説明者

野口 絵美 氏（ヘルシンキ在住 ネウボラ利用者）



野口 絵美 氏

(3) 主な説明内容

➤ ネウボラの制度概要

ネウボラは出産ネウボラと子供ネウボラに分かれており、妊娠期から就学前にかけての子供（6歳まで）とその家族全員を対象とするワンストップの家族支援制度である。専門教育を受けた同一の保健師による妊娠・出産・子育ての切れ目のない支援が特徴である。ヘルシンキ市においては社会サービス・健康管理課が管轄し、24のクリニックがある。フィンランドにおける約97%の家庭が利用している。ネウボラは設立当初からワクチン接種、健康診断も含め利用は無料で、参加も自由となっている。



➤ ネウボラの歴史

1922年：民間グループによる周産期リスク予防活動を出発点とし、8箇所のネウボラを設立した。

1944年：助産師と保健師の専門性の要件やネウボラの定義等が法律に定められた。ネウボラのネットワークは全国的に広まり、全国300箇所に設立。市町村自治体には出産ネウボラと子供ネウボラの設置が義務付けられた。

1970年：公的健康法で、ネウボラは保健師だけでなく様々な専門性をもつ人によって運営されなければならないと規定された。

2009年：ネウボラと衛生活動に関する規制が導入され、健康診断サービスの対象が家族にまで拡大した。

現在：全国に800箇所以上のクリニックがある。

➤ ネウボラの特徴

妊娠中から就学前まで同じ保健師（ネウボラおばさん）が、母子及び父親や兄弟を含む家族全体の支援を担当する。ネウボラおばさんは保健師や助産師の資格を持ち、必要に応じて他の専門職や機関（医療、子供デイケア、学校、ソーシャルワーカー等）との間のコーディネーター役となる。妊娠約6か月後に支給される母親手当（140ユーロまたは育児パッケージ）はネウボラへの参加が条件となっている。子供ネウボラは、保健師による検診が10回、医師による検診が3回（産後から1歳までの期間）、6歳までの定期検診がその内容となっている。

(4)主な質疑

- 原則として全ての妊婦と子供にネウボラおばさんが付くということは、1人のネウボラおばさんはかなりの数の妊婦と子供を担当すると思うが、どの程度か。
→ 1人のネウボラおばさんが、最大で妊婦は50人、子供は200人を担当する。この人数は法律上の上限となっている。

- 保護者はどの程度の頻度でネウボラに通う必要があるのか。
→ 子供が2歳までは月に1回、それ以降は年1回通うことが義務付けられている。通えない事情がある場合は、ネウボラおばさんが訪問してくれる。

- ネウボラおばさんによる指導の内容は全国統一なのか。
→ 全国統一であるが、子育ての流行などが反映されている印象がある。

- 日本では妊娠期、子育て期など時期によって相談する行政窓口も変わるが、ネウボラと日本とで行政によるサービスに大きな違いがあると感じるか。
→ ネウボラはずっと同じ保健師が担当してくれ、毎回事情を説明しなくて済むので楽だがサービスの内容と質はネウボラと日本でも大差ないと感じる。

2 ピックプリシン幼稚園

(1)概要

- ピックプリシン幼稚園は、ヘルシンキ市にある公立の幼稚園で、児童数は約130人。廊下のない間取りで、各部屋を仕切るドアはガラス埋め込みとなっており広々と全体を見渡せる作りとなっている。また、部屋ごとに壁の色を変え、児童が自らのいる位置を理解できるよう工夫がされている。



ピックプリシン幼稚園のマーリット園長先生

(2)説明者

ピックプリシン幼稚園長 マーリット ベサネン氏

(3)主な説明内容

3歳以上のクラスは、最大7人の児童グループに1人の先生と2人の保育士がつき、3歳未満のクラスは、最大12人の児童グループに同じく1人の先生と2人の保育士がつく。また、6歳児のプリスクールも2グループある。

近年は、言語や発音に問題のある児童が多く、そのような問題が判明した場合は、ネウボラの紹介を通じて児童を療法士やスピーチセラピストに受診をさせる。

(4)主な質疑

- ピックプリシン幼稚園とネウボラとの関係はどうであるか。
→ 児童が4歳のときにネウボラで受診し、そこで発育テストなどの検査を行い、ネウボラが記録をつける。その記録を受けて幼稚園が親と面談をし、必要に応じて児童へのインタビューも行い、その結果をネウボラに伝える。もし必要があればネウボラから医師や療法士へも連絡がいくというように連携がとられている。
- 他の幼稚園もネウボラと同様の関係であるのか。
→ 同様の関係である。ただし、近隣の幼稚園では、ネウボラの施設が幼稚園の中に配置される形も進んできている。
- 保護者が園児にお弁当を持たせることはあるのか。
→ 昼食はすべて給食であるからお弁当をもたせることはない。

3. 所 感

ネウボラは一人の保健師が妊娠期から子育て期まで一貫して母子、子供、その家族を支える制度として著名であるため、どれほど素晴らしい制度かと期待して視察に行った。たしかに、同じ保健師が担当してくれるため、利用者は毎回、体調や家庭の事情等を説明する必要がなく便利な制度であると感じた。しかし、お話を伺った利用者がフィンランド在住の日本人だったため、日本の妊婦・子育てサービスとの相違についてお聞きしたところ、行政の提供するサービスの内容と質は大差がないとのことであり意外であった。日本の行政サービスは



ショッピングモールに設置されたネウボラの外観を視察

縦割りとなっているので、これに横串を通して、利用者に関する情報を行政側で共有してスムーズなサービスにつなげることができれば、ネウボラと同等の優れた子育て支援のサービスが提供

できるのではないかと感じた。また、フィンランドでは国民全員に固有の番号が与えられ、国がその番号を通じて、国民の税や医療等の多くの個人情報を一元的に把握し、ネウボラにおいてもそうした情報利用が活かされているそうである。日本のマイナンバー制度によって実現しようとしている利便性が現実化しているのだと感じた。

ピックプリシン幼稚園の視察では、大多数の家庭が経済的理由もあって共働きしており、そのため2,3歳から幼稚園に入る子供がほとんどであること、幼稚園はすべて給食であり、朝食の給食サービスもあり多く利用されていること、子育てに祖父母世代はかかわらないこと等、日本の子育てと大きく異なると感じた。日本では料理の味、子育てのやり方など、各家庭の伝統が世代を通じて受け継がれ、子育ての基本は家庭にあるという考え方も根強い。それに対してフィンランドでは、子育ては親の責任であると同時に行政サービスを通じて社会全体で子育てをするのが当然と考えられているようであった。付加価値税が24%と高率であり高福祉の国だからこそ、日本と比較して行き届いた行政サービスができるのかもしれない。また、物価が高く、税率も高いフィンランドでは、平均的な給与の世帯では夫婦共働きをしないと生活が成り立たないとも聞いた。子育て支援策をはじめ様々な福祉施策の充実を求めるほど財源が必要となり、ひいては共働きが必須となるのであるなら、日本においてどこまで充実した福祉を求めるべきなのか、日本の風土や伝統を勘案しながら国民・住民のニーズにあった福祉を実現することが今後の大きな課題だと実感した。